

紙ふうせん

KAMIFUSEN No.69

成田市立図書館だより 第69号 2010年（平成22年）3月31日発行

編集 成田市立図書館 〒286-0017 千葉県成田市赤坂1-1-3 ☎ 0476-27-4646
FAX 0476-27-4641

<http://www.library.narita.chiba.jp>



藤田さんのゆかいな語り口と
フランさんのオートハープの音色に
誘われて♪
おはなしの世界を楽しみました。

方言がわからなくても
英語がわからなくても
おはなしが伝わるのは
不思議です



「おはなしお婆さん 藤田浩子さんとフランさんのおはなし会」2009. 10. 12

開館25周年記念文学講座

「天地人を語る 直江兼統の義と愛」

講師 歴史小説家

火坂 雅志 氏 2009. 10. 3

開館25周年記念文学講座は、歴史小説家の火坂雅志氏を講師にお迎えし、講演していただきました。火坂氏は2009年NHK大河ドラマ「天地人」の原作者で、同作品で第13回中山義秀*^①文学賞を受賞されています。主人公・直江兼統と火坂氏は同じ越後の人であり、長年、心に温めてきた兼統への強い思い

や、故郷への熱い気持ち、『天地人』の世界と、その背景を語って下さいました。

はじめに、大河ドラマの原作に決まった時の驚きや、ドラマでのエピソードの披露、学生時代に歴史小説家を志すきっかけとなった、司馬遼太郎の『燃えよ剣』という作品との出会いについてなど、ユーモアも交えながらお話しになりました。つづいて、上杉家の話になり、師である上杉謙信から教えを受け継ぎ、戦国乱世を必死に生き抜いていった兼統について、力強く次のように話されました。～裏切り、謀略、なんでも行う梟雄と呼ばれる武将たちがのし上がってきた戦国時代、生き残るためとはいえ、こんな生き方しかできないのかと謙信は「義」を唱えました。「義」とは「私利私欲に生きるのではなく、人との信義を大切にし公のために何ができるのかということを考えながら行動すること」です。一方で謙信は、金銀山・新田開発、殖産興業などを行い、戦国一の経済力を築き上げ「経済と義の両立」によって求心力を高めていきます。越後から会津へ、そして関ヶ原合戦後、米沢に移封され大幅に石高を減らされた兼統（上杉家）は、こうした教えを実践し、家臣たちを守り抜きます。徳川家康に、直江状（筋が通らないのは徳川どのではないかと、家康の詰問状に兼統が出した返書）を叩きつけた兼統も颯爽としていますが、農民たちと一緒に兼統は、土壌を知るために畑の土を食べながら改革を行っていったと言われています。そうした兼統の姿が好きなんです。～

兼統の「愛」の兜については、軍神説（愛宕大権現・愛染明王）と愛民説の2説あり、『北越軍団 謙信公語類』という上杉史料の中に「大将の根底とするところは「仁義礼智信」の5つを大切に、慈愛を以て衆人を憐れみ…」という言葉を発見し、米沢に伝わる、民を愛する愛民説*^②で書かれたことを説明されました。兼統たちが考え苦しみ命がけで行ったこと、弱い立場の人を考え庇う「仁（愛）」、謙信が掲げた心「義」、これら小説『天地人』に込められた思いについて「本来日本人が大切にしてきた気持ちですね」と触れていらしたのは、会場中が胸を打たれました。

また、兼統が蔵書5万冊の禅林文庫を創建したり、詩文集「文選」を翻刻するなど、子弟教育にも力を注いだことを紹介されました。

最後に、ドラマ化にあたり「半年近く、雪の中で暮らさなければならない、逃げ出さず、その辛い時をじっと耐え、そこで力を養い、春に大きな美しい花を咲かせる、この雪国の心を表現して下さい」と、それだけをお願いされたことをお話しになり、講演を締めくくられました。

多くの史料に裏打ちされた丁寧な解説もして下さり、終了後、参加された大勢の方々から「感銘を受けました」などのお言葉をいただきました。



*^①中山義秀（1900-1969） 福島県（現）白河市出身。大正15年から昭和8年まで私立成田中学校（現、成田高等学校）の英語教師として教鞭をとる。芥川賞作家。1993年中山義秀文学賞が創設される。

*^②愛民説について講演のなかで火坂氏が紹介した本『日本史探訪 第13集』角川書店 1975年（当館所蔵あり）海音寺潮五郎（作家）と尾崎周道（歴史学者）による、直江兼統についての対談を収録。二人とも愛民説を採っている。

平成21年度 図書館講座



市史講座

「江戸時代の下総村々にみる駆込寺と入寺」

講師 東京大学史料編纂所教授

佐藤 孝之 氏 2009. 11. 21

今年度の市史講座は、2階視聴覚ホールにて、東京大学史料編纂所教授の佐藤孝之氏を講師に迎え、講演いただきました。佐藤氏は、日本近世史を専門とされ館林市史等の市町村史の編さんに携われています。また、地方史研究者や地方史研究団体の全国組織である、地方史研究協議会では、中核となりご活躍されて

おられます。ちなみに今年11月には成田市で同協議会の全国大会が開催予定であり、現在その準備にあたられておられます。

江戸時代の寺院がすべてとっていいほど「駆込寺」の機能を持っていたことを中心に、資料を使いながら、わかりやすく説明して下さいました。一般的にいわれている「離縁のために寺に駆込む」というのは、むしろ特殊な事例であり、さまざまな理由で「寺に駆込む」という行為があったとのことでした。この駆込みを当時、「入寺」といっており、「寺入」「欠入」「欠込」ともいっていました。

この「入寺」の理由としては、3つあったとのことでした。1つ目は、「謝罪・謹慎」。これは自発的に駆込んで、もめ事を治める解決方法であり、江戸時代の代表的な入寺であったとのこと。2つ目は「処罰・制裁」。これは強制的なもので、火事を出した人が入寺する火元入寺などがあった。3つ目として、「救済・調停」。これは問題解決の最後の手段として、寺に仲介してもらうために入寺するものとのことでした。

また、成田市内の一番古い事例として、磯部地区の古文書も紹介されました。他に、成田山新勝寺の事例として、成田村と寺台村との一件の仲介の事も紹介して下さいました。

今まで知らなかった江戸時代の寺院の果たした役割を知ることができ大変参考になった講演ではなかったかと思われまます。当日は119名の方にご参加いただき、「大変興味深かった」等数多くの好評な感想をいただきました。今回の講演録は平成22年度発行の「成田市史研究」に掲載する予定です。



開館25周年記念 昔あそび講座

「けん玉で遊ぼう」

講師 日本けん玉協会柏支部長
帯 一雄 氏 2010. 1. 11

「昔の生活やあそびがわかる本はありますか？」毎年多くの小学生が調べにきます。本で調べるだけでなく実際に体験してもらおう！と開館25周年の記念行事として「昔のあそび講座」を開催しました。けん玉の発祥は16世紀のフランス。「ビルボケ」と呼ばれる玉のついた小さな木で、王様や貴族の遊びとして広まりました。日本へは江戸時代に長崎に伝わり、大人が酒席で楽しんだものでした。明治時代になると文部省が子どもたちの遊びとして紹介し、大正時代には今の形のもとになる「日月ボール」が考案され広まり、技も考え出されていったようです。この十字型は日本独自で、玉は太陽、三日月型の皿を月に見立てています。

けん玉をはじめてやる子が多かったようですが、みんな講師の先生の話をよく聞いて終わるころには思った以上の上達ぶりでした。



「つみ木で遊ぼう」

講師 財団法人オイスカ
森のつみ木広場 2010. 1. 11

檜の間伐材で作られた1万6千個のつみ木がやってきました。森の現状や大切さを勉強した後は、ドキドキしながらつみ木のシャワーを浴び、檜の温もりと香りに包まれました。「仲良くわけあう」「けったりなげたりしない」「ともだちの作品も優しく大切にする」3つの約束を守り、思い思いの作品を完成させました。

最後には、みんなの作品が長い線路でつながって、ひとつの街になりました。



編集後記

開館25周年の記念行事がすべて終了しました。たくさんの方にご参加いただき、素敵な記念すべき1年となりました。まだまだ25年！留まることなく前進し続けたいと思います。図書館の進化にご期待下さい。

成田市立図書館だより No. 69
発行 成田市
編集 成田市立図書館
〒286-0017 千葉県成田市赤坂1-1-3
☎0476-27-4646
発行日 2010. 3. 31
登録番号 成教図09-049